

# 読書のすゝめ

その10

H 28 5 / 26

## 若冲展!

今年、生誕300年を迎え、益々注目される画人・伊藤若冲。東京上野公園内にある東京都美術館で24日まで『若冲展』が開催されました。

連日の大混雑はデイズニールランドの人気アトラクションを凌駕するほど! 9時半の開館に、朝4時過ぎから長蛇の列。(入室までに200分から300分待ちとは!!)

それでも見たい若冲の絵の魅力について、小説ではどのように書かれているのでしょうか。



## 『若冲』澤田瞳子（文藝春秋）

緻密すぎる構図や大胆な題材、新たな手法で周囲を圧倒した天才は、いったい何ゆえにあれほど鮮麗で、奇抜な構図の作品を世に送り出したのか?

執筆者の澤田瞳子さんは時代小説で数々の受賞歴を誇る中堅の実力作家。若冲の腹違いの妹「志乃」が語り手となった物語は進む。「若冲が尼姿の妹と暮らしていた」との記録を基に志乃を創りだしているが、「死んだ妻に対する後悔」で鬼気迫る絵を描いている、という部分は大胆な仮説なので、伝記を期待すると肩すかしである。しかし、若冲同時代に京都で活躍した池大雅、与謝蕪村、円山応挙、谷文晁、大典などの交流が描かれ、当時の京都で起こった尊王攘夷派の公家が追放された宝暦事件や天明の大火が取り上げられているので、若冲の生きた時代背景がわかる。青物問屋の家業や家族、友人との関係や若冲の生活ぶりや、彼に影響を与えたであろう事象も理解できる。彼が生身の人間として描かれ、身近に感じられる。



## 『若冲百図』生誕三百年記念（別冊太陽）

代表作とその優品100図を選んで多彩な画業を一望している。第一線の研究者たちによる論考や、辻惟雄×小林忠スベシャル対談が収録されている。



画家の生涯をドラマチックに描いた小説は他にもあります。

## 『等伯』安部龍太郎（日本経済新聞出版社）

第148回（平成24年度上半期）直木賞受賞作  
養父母の非業の死により故郷を追われ、戦のただなかへ。都に出て天下一の絵師になると決意した長谷川等伯を骨太に描いた傑作長篇。



鳥獣花木図屏風



う。義父母、最初の妻、師であり心の支えだった利休。そして最愛の息子、久蔵。絵描きの業は身内をも犠牲にしてしまう。戦国という時代は一個人の執着に対する対価がとてつもなく大きい時代だったといえる。

※読後は、代表作『松林図屏風』（東京国立博物館蔵・国宝）や京都智積院の国宝『楓図壁貼付』が見たくなる一冊です。